精 神 医 学 講 座

教　授：	中山　和彦	精神薬理学，てんかん学
教　授：	笠原　洋勇	老年精神医学，総合病院精神医学，心身医学
教　授：	伊藤　　洋	精神生理学，睡眠学
教　授：	中村　　敬	精神病理学，森田療法
准教授：	宮田　久嗣	精神薬理学，薬物依存
准教授：	須江　洋成（兼任）	臨床脳波学，てんかん学
講　師：	忽滑谷和孝	総合病院精神医学
講　師：	山寺　　亘	精神生理学，睡眠学
講　師：	小曽根基裕	精神生理学，睡眠学
講　師：	小野　和哉	精神病理学，児童精神医学
講　師：	中西　達郎	総合病院精神医学
講　師：	橋爪　敏彦	老年精神医学，総合病院精神医学
講　師：	古賀聖名子	精神薬理学，精神医学

教育・研究概要

I.　精神病理・精神療法研究会

精神病理学分野では，自閉性の障害と大うつ病が併存した場合の病理構造の解明を進めた。自傷行為の病理構造について，非適応的防衛機制という観点から研究を行い，この障害が他者に向けられた自己表現と，自己の衝動コントロールの2つの極性があることを明らかにした。現代うつ病の病理構造の整理を行った。職場の休職者の背景因子についてアンケート調査による研究を行った。AIDS患者の心理的問題について基礎調査を開始した。

II.　児童精神医学研究会

発達障害の治療法開発の研究を行っている。特に独自に開発したアスペルガー障害のDiary Trainingについては症例を蓄積して効果の判定を行っている。発達障害の精神科外来での治療のあり方について，都内の診療施設100箇所を対象にアンケート調査を施行し，現状の解明を行い厚生労働省に研究報告した。

III.　森田療法研究会

日本森田療法学会の事業として「外来森田療法のガイドライン」を策定し，森田療法学会雑誌20巻1号に掲載した。慢性抑うつ患者の性格学的研究，パニック障害と全般性不安障害に関する性格学および共存障害の研究，強迫性障害のサブタイプに関する研究，不安障害・気分障害の経過中に生じる「寝込み反応」についての精神病理学的研究を継続した。また今年度から強迫性障害女性例のライフストーリーに関する質的研究，入院森田療法におけるうつ病の回復要因についての研究を開始した。

IV.　薬理生化学研究会

基礎研究では，1）脳内透析法およびラジオイムノアッセイ法による新規向精神薬の脳内作用機序に関する研究，2）薬物依存の形成，維持，再発における学習・記憶系脳内神経回路の役割，および，学習・記憶の観点からみた薬物依存の新規治療薬開発に関する研究を行った。臨床研究では，1）向精神薬の臨床的有用性および有害事象に関する研究，2）Positron computed tomography（PET）を用いた精神疾患の脳内受容体に関する研究，3）ウイルス学講座との共同研究で精神疾患における遺伝薬理学的研究，4）アカシジアの関連遺伝子に関する研究を行った。

V.　精神生理学研究会

本年度は，1）Cyclic Alternating pattern（CAP）を指標とした抑肝酸やクエチアピンの睡眠内容に与える影響に関する研究，2）経鼻的持続陽圧呼吸管理下の閉塞型睡眠時無呼吸症候群における残遺眠気に関する研究，3）精神生理性不眠症に対する外来森田療法および認知行動療法の治療効果に関する研究，4）中枢性過眠症に対するモダフィニルの処方実態と有効性に関する研究，5）勤労者における休養と睡眠のあり方に関する研究，6）機能性胃腸症における睡眠障害に関する研究，などを継続あるいは新規着手した。

VI.　老年精神医学研究会

1998年より継続している新潟県糸魚川市での疫学調査において，介護保険の利用状況・費用調査，生命予後に関する調査を行った。また，総合病院精神医学研究班および脳神経外科との共同研究として「癌患者における精神障害」を行い，乳癌患者を対象として精神障害の有無，精神症状の程度，背景因子との関連，身体疾患との関連等を調査した。なお，本年度から，老年精神医学研究会を中心として本院において「認知症専門外来」を開設した。

VII.　総合病院精神医学研究会

まず，うつ病再発予防教育では，ビデオ教材をスライド化し，より柔軟に患者のニーズに対応するこ

とを目指した。効果判定の心理検査では，認知・行動・感情の3側面と総合的なパーソナリティの測定に加え，うつ病の寛解期における睡眠状態を把握する目的で,新たに睡眠評価尺度も取り入れた。また，最近増加しているPersonalityの未成熟性や偏りが存在する症例にも対応しうるプログラムを検討している。次に，末期患者に対する終末期医療（緩和ケア）では，国立がんセンター東病院との数年来の共同研究により，がん患者，その家族，および遺族の心理的課題に関する研究を行った。さらに，入院患者やスタッフから要請を受けて，臨床心理士を中心とした精神科スタッフがメンタルサポートを開始した。

VIII. 臨床脳波学研究会

6Hz棘徐波複合の脳波における誘発と薬物，とくに非定型抗精神病薬との関連を前年度に続き検討した。その他，てんかんにみられる前駆症状についての研究を行った。また，精神生理研究班や脳神経外科との共同研究として，診断や治療困難例についての検討を行い，これまでほとんど注目されなかったひきこもりに焦点を当てて，その臨床的特徴を抽出した。さらに昨年度よりてんかんに合併した精神症状に対する治療の標準化に関する研究を継続して行った。

IX. 臨床心理学研究会

本年度も心理療法の技法の向上を図るために，症例検討を継続して行った。また，認知行動療法，森田療法などのさらなる学習を行った。心理テストについては，発達障害，高次脳機能障害を中心に研究を進めた。慈恵心理臨床の集い（研究会）では，宮森孝史先生を講師として招聘し，高次脳機能障害について学習を深めた。このような臨床・研究活動のみならず，心理研修生を受け入れ，心理学的教育に積極的に取り組んだ。

「点検・評価」

2008年度においても，9部門の研究会からなる研究活動を行い，基礎的研究から臨床研究まで幅広い方法論で研究活動を行った。このことは，脳科学から精神療法まで幅広い知識が必要とされる精神科治療を実践するに際して望ましい研究体勢にあるといえる。本年度は，これに加えて，児童期から老年期まで幅広い疾患に対して，それぞれの研究会が専門外来を開設したり，異なった研究班が共同して研究活動や治療体制を設けるようになった。このことは，医学科における研究と臨床のあり方として望ましく，また，教育の観点からも良好な効果が期待される。研究活動においては，従来通り，それぞれの研究会が積極的に研究費を獲得して研究を行い，活発な学会発表がなされている。しかし，原著論文，特に，学術的に権威のある国際誌などへの投稿は多いとはいえず，今後，より厳密な研究計画に基づいた独創的な研究が求められる。さらに，各研究部門での独立した研究テーマにとどまらず，教室全体として大きな研究目標を設け，基礎と臨床のジョイントした研究を計画する必要を感じている。

研 究 業 績

I. 原著論文

1) Nakayama K, Katsu H, Kitazumi K. Effect of distigmine bromude on the centralcholinergic system. J Psychophamacology 2008 ; 23(2) : 190-3.

2) Miyata H, Hironaka N(Erato), Takada K(Teikyo Univ), Miyasato K(Funomori Cli), Nakamura K(Int Univ of Health and Welfare), Yanagita T. Psychosocial withdrawal characteristics of nicotine compared with alcohol and caffeine. Ann NY Acad Sci 2008 ; 1139 : 458-65.

3) Ozone M, Yagi T, Itoh H, Tamura Y, Inoue Y, Uchimura N, Sasaki M, Shimizu T, Terzano MG, Parrino L. Effects of zolpidem on cyclic alternating pattern, an objective marker of sleep instability, in Japanese patients with psychophysiological insomnia : a randomized crossover comparative study with placebo. Pharmacopsychiatry 2008 ; 41(3) : 106-14.

4) Shinagawa S, Toyota Y, Ishikawa T, Fukuhara R, Hokoishi K, Komori K, Tanimukai S, Ikeda M. Cognitive function and psychiatric symptoms in early-onset frontotemporal dementia and late-onset frontotemporal dementia. Dement Geriatr Cogn Disord 2008 ; 25(5) : 439-44.

5) 中山和彦. 森田療法の成立に先立つ「祈祷性精神症(病)」研究の意義. 日森田療会誌 2008 ; 19(2) : 157-68.

6) 宮田久嗣. 薬理作用からみた第二世代抗精神病薬の臨床特性と使い分け. 東京精神病院誌 2008 ; 23 : 30-7.

7) 山寺 亘, 伊藤 洋, 井上雄一, 神林 崇, 田ヶ谷浩邦, 亀井雄一.【睡眠障害の診断・治療ガイドライン】不眠症の診断・治療・連携ガイドライン. 睡眠医療 2008 ; 2(3) : 285-9.

8) 小曽根基裕, 沖野慎治, 中山和彦, 中田浩二. Func-

tional Dyspepsia にみられる睡眠障害に関与する因子についての研究. Ther Res 2008 ; 29(4) : 538-40.

9) 小曽根基裕, 沖野慎治, 中山和彦, 中田浩二. Functional dyspepsia の診断に関与する因子についての研究. 消化管運動－目にみえない消化器疾患を追う 2008 ; 10(1) : 9-11.

10) 王 淑娟, 品川俊一郎, 中村紫織, 鄭 洪新, 繁田雅弘. 日中両国の認知症高齢者の BPSD に関する比較検討. 日保健科会誌 2008 ; 11(1) : 12-9.

11) 落合結介, 中山和彦. 膀胱がん術後の適応障害に sulpiride が奏功した 1 例. 精神 2008 ; 12(4) : 324-7.

II. 総　説

1) 中山和彦. メンタルヘルスに関係する問題 増加する更年期障害の意味すること. こころの科学 2008 ; 139 : 47-51.

2) 中山和彦. ドイツ医学とイギリス医学の対立が生んだ森田療法 森田理論をその源流から探る. 精神誌 2008 ; 110(8) : 698-705.

3) 宮田久嗣. 喫煙およびニコチンと精神神経疾患 ニコチン性アセチルコリン受容体の役割について. 日神精薬理誌 2008 ; 28(4) : 149-58.

4) 宮田久嗣. 第二世代抗精神病薬の薬理 ドパミン D2 受容体遮断の最適化の意味を考える. 医のあゆみ 2008 ; 227(7) : 497-501.

5) 山寺 亘, 伊藤 洋. 不眠症. 最新医 2008 ; 別冊 (新しい診断と治療の ABC 56 : 睡眠・覚醒障害) : 69-81.

6) 小曽根基裕, 伊藤 洋. 【睡眠奪取】時差症候群での睡眠奪取. 臨脳波 2008 ; 50(12) : 710-7.

7) 中村晃士, 中山和彦. 【パーソナリティ障害の現在】パーソナリティ障害の評価スケール. 精神科 2008 ; 12(2) : 86-91.

8) 品川俊一郎, 繁田雅弘. 【認知症予防 認知症予防はどこまで可能か, エビデンスから展望する】研究成果から予防を考える 薬物療法による予防. Mod Physician 2008 ; 28(10) : 1485-9.

9) 沖野慎治, 瀬戸 光, 樋口英二郎, 中村晃士, 小野和哉, 中山和彦. HIV 感染患者をとりまく環境と心理的ストレスに関する予備研究. 社精医研紀 2008 ; 37(1) : 30-6.

10) 落合結介, 笠原洋勇. 【アルツハイマー病の診断と治療】アルツハイマー病の診断と治療 アルツハイマー病にみる特徴的な症状と経過(初期症状, 早期発見のために). 診断と治療 2008 ; 96(11) : 2301-6.

III. 学会発表

1) 中山和彦. (招請講演)女性の不安と森田療法. 第 37 回日本女性心身医学会学術集会. 東京, 7 月.

2) 中山和彦. ドイツ医学とイギリス医学の対立が生んだ森田療法－森田理論をその源流から探る. 第 104 回日本精神神経学会総会. 東京, 5 月.

3) Miyata H. (Symposium : Use of Legal Recreational Substances : Tobacco, Coffee, and Betel Nut) Psychosocial withdrawal characteristics of nicotine compared with alcohol and caffeine. 13th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting. Tokyo, Nov.

4) 宮田久嗣. (シンポジウム)ニコチン嗜好性の基礎と臨床. 第 43 回日本アルコール・薬物医学会・第 20 回日本アルコール精神医学会・第 11 回ニコチン・薬物依存研究フォーラム・第 28 回アルコール医学生物学研究会平成 20 年度合同学術総会. 横浜, 9 月.

5) 宮田久嗣. (特別講演)薬理作用からみた新規抗精神病薬の臨床特性と使い分け. 第 14 回東京精神神経科診療所協会学術研究会. 東京, 10 月.

6) 宮田久嗣. (特別講演)薬理作用からみた第 2 世代抗精神病薬の臨床特性と使い分け. 第 23 回東京精神科病院協会学会. 東京, 10 月.

7) 宮田久嗣. Aripiprazole の不安障害に対する有効性の予備的検討. 第 1 回日本不安障害学会. 東京, 3 月.

8) Yamadera W, Aoki R, Ochiai Y, Harada D, Obata K, Aoki K, Sato M, Obuchi K, Ozone M, Itoh H, Nakayama K. The clinical investigations of team treatment for breathing-related sleep disorders in Jikei University Hospital. 13th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting. Tokyo, Nov.

9) 山寺 亘, 青木 亮, 原田大輔, 小幡こず恵, 青木公義, 佐藤 幹, 大渕敬太, 小曽根基裕, 伊藤 洋, 中山和彦, 森脇宏人, 千葉伸太郎. (シンポジウム : 睡眠時無呼吸の合併症)呼吸関連睡眠障害と睡眠不足症候群 ・不適切な睡眠衛生. 日本睡眠学会第 33 回定期学術集会. 福島, 6 月.

10) 山寺 亘, 伊藤 洋, 佐藤 幹, 青木 亮, 原田大輔, 大渕敬太, 小曽根基裕, 中山和彦. 慢性不眠症に対する集団認知行動療法の有効性に関する実証的研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「睡眠医療における医療機関連携のガイドラインの有効性検証に関する研究」平成 20 年度研究報告会. 東京, 12 月.

11) Ozone M, Okino S, Aoki K, Nakayama K, Nakata K. Gender difference in Functional Dyspepsia -by means of psychological and functional tests-. 13th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting. Tokyo, Oct.

12) 小曽根基裕, 大渕敬太, 佐藤 幹, 青木公義, 小幡こず恵, 原田大輔, 青木 亮, 林田健一, 山寺 亘, 石

井正則，伊藤　洋，中山和彦．睡眠薬による平衡機能への影響－最も有効な転倒防止策は何か？－．第11回日本薬物脳波学会学術集会．東京，6月．

13)　小曽根基裕，八木朝子(太田睡眠科学センター)，伊藤　洋．新しい睡眠脳波解析・CAP(Cyclic Alternating Pattern)法の睡眠研究および医療における有用性．第38回日本臨床神経生理学会学術大会．神戸，11月．

14)　小曽根基裕，小幡こず恵，伊藤　洋．Quality of Lifeと睡眠．第24回不眠研究会．東京，12月．

15)　中村晃士，森　美加，大渕敬太，山寺　亘，中山和彦．現代の就労者と同一性危機．第15回日本産業精神保健学会大会．大阪，6月．

16)　中村晃士，瀬戸　光，沖野慎治，森　美加，小野和哉，中山和彦．女性就労者が休職に至る背景－精神科外来通院患者の調査・男女の比較検討から－．第28回日本社会精神医学会．宇都宮，2月．

17)　小林伸行，嶋田和也，清水昭宏，近藤一博．ヒトヘルペスウイルス(HHV)-6潜伏感染中間状態特異的タンパクによる気分障害の発症機序．第56回日本ウイルス学会学術集会．岡山，10月．

IV．著　　書

1)　中山和彦．思春期と非定型精神病．中根　晃，牛島定信，村瀬喜代子編．子ども思春期の精神医学：詳解．東京：金剛出版，2008．p.429-34.

2)　山寺　亘．第2章　欠かせない関連領域の非常識－脳神経外科の赤っ恥　4.精神科，第4章　欠かせない関連領域の常識－SOSを出す前に　5.精神科．谷諭編著．知ってるつもりの脳神経外科の常識非常識．第2版．東京：三輪出版，2008．p.96，402-8.

3)　小曽根基裕，青木公義．II.睡眠のトピックス　8.うつ病の睡眠障害の特徴．内山真責任編集．専門医のための精神科臨床リュミエール8：精神疾患における睡眠障害の対応と治療．東京：中山書店，2009．p.157-63.

4)　中村紫織．認知症の基礎知識　認知症とは．本間昭．介護福祉士養成テキストブック11：認知症の理解．京都：ミネルヴァ書房，2009．p.12-6.

5)　小幡こず恵，小曽根基裕．第1部　総論　C.睡眠障害の検査，評価法．山寺　亘編．初学者のための睡眠医療ハンドブック：ライフステージ別症例から学ぶ．東京：診断と治療社，2009．p.74-80.

V．そ の 他

1)　品川俊一郎，角　徳文，中山和彦．性嗜好異常を主訴とし，その後の経過で進行性核上性麻痺と診断された一例．老年精医誌 2008；19(9)：1009-15.

2)　宮田久嗣，古賀聖名子．薬物依存の形成・維持・再発の脳内神経学的機序と新規治療の開発に関する研究．平成19年度科学研究費補助金報告書(基盤研究C)．2009.

3)　宮田久嗣，昼間洋平，板坂典郎(専修大)．ニコチン依存の形成と維持における環境刺激の関与についての検討－学習・記憶の脳内機構の観点から－．平成19年度喫煙科学研究財団研究年報．東京：財団法人喫煙科学研究財団．2008．p.617-22.

4)　中山和彦．「生活の質」を高めるために　QOL：クオリティ・オブ・ライフ　その41：抗てんかん薬は気分を調整する．ともしび 2008；4：14-5.